



七柏集
壹



5
2237
1



利5
2.297
1-4



題俳諧七柏首

江東有一叟角巾野服哦於菰
蘆中聽其吟哦則非詩非賦又
非和歌風調可以寓意滑稽原
以解紛者蓋我知之矣是非世
之所謂俳諧者耶吾聞以俳諧
鳴一世者前有貞德後有芭蕉
自蕉葉之敗也不知經幾霜露

七柏序

明治四十一年五月十四日
富山房紀念
氏再贈

中堅達堂
藏書之印



也甚間一二題名字者亦寥
不耐秋矣是編也可謂輞川芭
蕉指存雪牛矣上下百年比擬
七體種極變句通真猶尋
筆生擬古詩施無畏者現三十
三才也邪學諸戲也詩似末和
歌似旦俳諧似丑淨今採身一
大場上色皆演者誰居叟耶

非耶叟者為誰兒童誦夢太走
卒知雪中葦固不待吾言矣

天明改元夏五 南畝子撰



念十の志を以て進んでくるといふを
 色慾の爲に入祿年中に之を
 花實の如くに備へて置くに
 念十の志を以て進んでくるといふを
 忘れぬこと最も難しき事なり
 中興一流の徳も万人の心二人を
 進んでくるといふを以て進んでくるといふを
 及んで大和島松を以て進んでくるといふを

を以て進んでくるといふを
 かゝる志を以て進んでくるといふを
 今更なる志を以て進んでくるといふを
 志を以て進んでくるといふを
 七度の變化を以て進んでくるといふを
 空解の志を以て進んでくるといふを
 志を以て進んでくるといふを
 志を以て進んでくるといふを
 志を以て進んでくるといふを

此心本無高人の志多むらう下を
さく見見にさうれをれをさう
小まん柳のやゆや。おのれを
さうさうさうさうさうさう
んや用ひさうさうさうさう
か。さうさうさうさうさう
さ。底をさうさうさうさう
いさ。いさ。いさ。いさ。いさ。

志が二筋よりかえり金さうさう
共。いさ。いさ。いさ。いさ。いさ。
小。いさ。いさ。いさ。いさ。いさ。
さう。いさ。いさ。いさ。いさ。いさ。
よ。いさ。いさ。いさ。いさ。いさ。
力。いさ。いさ。いさ。いさ。いさ。
が。いさ。いさ。いさ。いさ。いさ。
あ。いさ。いさ。いさ。いさ。いさ。

ちんちん等能回さの附句おれん
てあ人の心なるしり

一 河一あひハ長既凡何を公能知
あし従ふもいふも何れも
つるも一や何ん志のしその合
際といはまらんよりの化者と何は
何れ一と古人の之様よりのは
句の好悪を先中一を合を好し

用捨ちりれりも何れりし

- 一 四永子のおほりし先以乱雑一り
- 一 一やも細ひりけり眼子のも一投すれ也
- 一 倭漢乃聯句ハ心一をりも一倭ハ
之縁の心ゆをいひ得ハ其世名子
古来府に以乃押韻一しあしを
其えの盛細をたし其容子ハ南郭
先生の徒京極高明子あし

指合歌十首

明心居士貞徳

依社ハ式目ヲあそおほく
和漢のおとく 吾等ハ
和漢ハ季志述懐旅同字
まゝあのみく けらふとを
けらふいとあはふ色を
七句をふ又句又句ハ三句を

山を又あはれ 神田
名不聞 神田 新教志
述懐 懐旧 表
鬼女 虎 狼の 十句
面平 一 一 一 一 一
新式の一 一 一 一 一
二句此 三句

四變而為沈宋律詩と云ふ
何れも實を以て和するも和を
其一代がたりの文のそとを又か
御所の建ちかた

何れも實を以て和するも和を
其一代がたりの文のそとを又か
御所の建ちかた

湯の辛あるは
後二位家隆

あつらへたるのむね
藤訥言為家

あつらへたるのむね
西川法師

あつらへたるのむね
待賢院堀川

あつらへたるのむね
宗祇宗長五川の城

疎のなす二三此月

又

一海を志すは

意日事

又貞后發傳津入宗周古風を踏破

新風を起し一旬の晒磨を人

やめ無所し劇場を

風を移し傳ふ天下に

の宗周

井底をわ

花傳

飲海戒

又

下

操

画本に向あはるるを演るる松
乃々

旅人我々も少くも

又山菜花を摘み

鶯^{カキ}の心も母の心も

又

齡とて一平の松

海の家は地味な草の香

卯月の雪を振る松

既り杜律の風を掃く松

寂さるるの幽然の傍に人

現座を解く松

何れも海原の松

旅しき海を渡る松

六丁も松

さるる風を渡る松

その用を記すに未だ事記の撰あり

その用を記すに未だ事記の撰あり

その用を記すに未だ事記の撰あり

其の用を記すに未だ事記の撰あり

其の用を記すに未だ事記の撰あり

其の用を記すに未だ事記の撰あり

又

其の用を記すに未だ事記の撰あり

其の用を記すに未だ事記の撰あり

其の用を記すに未だ事記の撰あり

其の用を記すに未だ事記の撰あり

其の用を記すに未だ事記の撰あり

其の用を記すに未だ事記の撰あり

其の用を記すに未だ事記の撰あり

其の用を記すに未だ事記の撰あり

其の用を記すに未だ事記の撰あり

七
 多岐の入り山を越く胸のこも
 所を指す標如信跡乃削
 赤き子孫のこころの十言を
 富を疑ふ人あり乃和
 なるのこころを神を
 族の傀儡の始末ついで
 初めかみなりとありて
 多岐の月夜にありて

天竺の山を越く大徳
 神を計るる如く
 多岐の山を越く伊勢系
 たりとありて
 十
 信保の山を越く
 多岐の山を越く
 多岐の山を越く
 多岐の山を越く

西東小みんまこと命一
隠石さるさし船の志さる
高き天立さけさ浪まら
廣心世界をらんハ徳栄
二階さうおと川を一船下
人ま川急の山路さ一津
麻さの月入細ささの
山法さぬ想む松さ出さ

十ウ

龍河海流さまらさる
さあくさく一小神さる
捨さるし河さる五人組
口利さのまら山びり武者
酒ささる花さあく鬼さ城
流さる血さるあさあらの夕陽

檀林の次

蓼太

折角こそ思はるぬ部や 心も様
りふ言もふらりぬるむら子もを
酔醒年暮れを井戸を掘らん
裸そ起し 言のふれらる
河へ流るる月乃菊の盃人
花も多し なる稲妻の寝

天帝ノ言ハ正徳ノ事ニ 采
乙女の管弦雲小鳥夕
意五郎の標眉も惚くくもひん
江戸冬葉月あふくとて花もん
寺忠幸齋屋富なるともた
盃のお中をさげるともた
神の本を何となく絶えはれさく
すゝ麻積入意の眼の玉

大解虫の泡を噴かすやきく
 石^{シヤ}鹼^{ホシ}入舟や夕月を引ん
 月元の親供ひ粉う使^{ホシ}あま
 砂をま白ふ赤金やみん
 + 某國^{シヤ}交中^{ホシ}七^{ホシ}約^{ホシ}器^{ホシ}を^{ホシ}匠^{ホシ}の^{ホシ}器^{ホシ}續
 志^{ホシ}の^{ホシ}器^{ホシ}の^{ホシ}器^{ホシ}の^{ホシ}器^{ホシ}の^{ホシ}器^{ホシ}
 乳母の器の器持^{ホシ}の^{ホシ}の^{ホシ}の^{ホシ}の^{ホシ}
 白化入小海^{ホシ}の^{ホシ}の^{ホシ}の^{ホシ}の^{ホシ}の^{ホシ}

町とつ^{ホシ}の^{ホシ}の^{ホシ}の^{ホシ}の^{ホシ}の^{ホシ}の^{ホシ}
 杖と杖も^{ホシ}の^{ホシ}の^{ホシ}の^{ホシ}の^{ホシ}の^{ホシ}
 五十男^{ホシ}四十女^{ホシ}の^{ホシ}の^{ホシ}の^{ホシ}の^{ホシ}
 糸^{ホシ}の^{ホシ}の^{ホシ}の^{ホシ}の^{ホシ}の^{ホシ}の^{ホシ}
 少^{ホシ}の^{ホシ}の^{ホシ}の^{ホシ}の^{ホシ}の^{ホシ}の^{ホシ}の^{ホシ}
 態^{ホシ}の^{ホシ}の^{ホシ}の^{ホシ}の^{ホシ}の^{ホシ}の^{ホシ}の^{ホシ}
 清^{ホシ}の^{ホシ}の^{ホシ}の^{ホシ}の^{ホシ}の^{ホシ}の^{ホシ}の^{ホシ}
 常^{ホシ}の^{ホシ}の^{ホシ}の^{ホシ}の^{ホシ}の^{ホシ}の^{ホシ}の^{ホシ}

拂々^リ此處美女^ヲを^レ見^ルに
 〰〰〰^ミの^ク矢^ノ根^ノ牛^ノ房^ノ樓^ノを
 葫^ニ蘂^ニ入^リ緋^ニ威^ニ蕪^ニ菊^ニの^ク印^ノ不^レ威^ク
 元^ノ報^ノ〰〰〰^クを^レ看^ルに^レ数^ク
 を^レ送^リて^レ居^ルに^レあ^く十^月
 牛^ノ頭^ノ馬^ノ頭^ノ秤^ノ眾^ノ覺^ノ悵^ノ
 何^レを^レ〰〰〰^ク〰〰〰^ク〰〰〰^ク
 瓜^ノの^ク麻^ノ冷^ノ〰〰〰^ク〰〰〰^クの^ク中^ノの^ク流^ノ

岫^ノを^レ〰〰〰^ク雲^ノ女^ノと^レ皂^ノ物^ノと^レ赤^ノく^レ之^ノを
 斗^ノ年^ノ一^ノ文^ノ芝^ノ踏^ノ入^ノ跡^ノ
 山^ノ田^ノ穢^ノ〰〰〰^ク美^ノを^レ花^ノ不^レ神^ノ寂^ノ在^ノ
 緑^ノ青^ノ〰〰〰^ク〰〰〰^ク〰〰〰^ク〰〰〰^ク
 異^ノ國^ノ一^ノ屏^ノ風^ノを^レ美^ノを^レ〰〰〰^ク八^ノ室^ノ〰〰〰^ク
 武^ノ烈^ノの^ク君^ノ〰〰〰^ク〰〰〰^ク〰〰〰^ク〰〰〰^ク
 組^ノ板^ノ〰〰〰^ク〰〰〰^ク〰〰〰^ク〰〰〰^ク〰〰〰^ク
 所^ノを^レ素^ノ〰〰〰^ク〰〰〰^ク〰〰〰^ク〰〰〰^ク

万葉より傳ふる男まゝの跡
 達六[#]縁^{サリ}ひと何と出らん
 芥山より深山本を其江戸の人
 雪片々多る。八節の春原
 鳥と叫き又鴛鴦と物思ひ
 不埒の田面月母養一
 賢翁を尋り結ぶ言詞忙
 りん親又めと召かす

池子^{ナリ}源花龜益哉^{ナリ}捧まぬ
 仙家の千とせ慢^{ナリ}政をさす
 孫ももろくく^{ナリ}枕をたさぬ
 七箇^{ナリ}の^{ナリ}と^{ナリ}宝^{ナリ}集^{ナリ}の^{ナリ}
 白馬より城下を花のふ
 る多^{ナリ}走^{ナリ}の^{ナリ}控^{ナリ}室^{ナリ}子^{ナリ}

虚栗の以

蓼大

千く年削字様や君の歌大工
月何しくう中簾外の子寸
急なる秋の掃入替あれし中
舟あつたあま史まゝ船
舟よきと明使の徳探らん
風とともをみひ舟行し初霧

此の釜中乃濁琴と浅き
高のり言尾の響おきらん
阿な掬入細眉男のうしや
高知屋一 榎門の教
あつ七日血涙の経と隣り寸
推扇と作しそ柑の實をまじ
殿朽て月の光と河の流をま
七休言まき秋とまじ

歌老如吳天の雪を鏡に見
舞を窺人と思ひ持しくや
花のつゝ酒をい里をぬるる
少を穿て幾まき 此庫
+ 盜賊の登る棟の妻や 燈をく人
衆をさす多をくさすは 此妻
深み一様さ人 崎のまを川 此女
人とさ 此神 此甲 此女 此ま 此女

舞鶴一 言 此の 此 此 此
ありのり ぬる 此 此 此 此
此 此 此 此 此 此 此 此
百鬼 荷 此 此 此 此 此 此
増 此 一 里 此 此 者 の 人 此 此
此 此 此 此 此 此 此 此
八月 七 月 此 此 此 此 此 此
秋 小 僧 此 此 此 此 此 此 此

十
人 流 せ ら ぬ の ち り せ ー せ
小 屋 子 志 留 乙 女 の 唄
五 橋 子 百 千 五 音 入 端 子 唄
産 山 一 一 一 一 一 一 一 一 一
皇 親 一 一 一 一 一 一 一 一 一
宮 一 一 一 一 一 一 一 一 一

續 虚 雲 本 の 歌

蓼 太

あ ら け ち 纏 子 一 一 一 一 一 一 一
う ち の ち ち ち ち ち ち ち ち ち
頃 冬 の 昼 隔 ち ぬ せ 屋 借 子 唄
節 先 遣 一 一 一 一 一 一 一 一
月 陰 子 秋 子 秋 子 秋 子 秋 子
浦 子 一 一 一 一 一 一 一 一 一

抱^リ神を授刻^リの^リを^リ流^リる^リ葉
 下^リの^リ霜^リを^リか^リき^リ大^リ名^リは^リは^リく
 幼^リね^リを^リ此^リ長^リ命^リを^リめ^リる^リ入^リか^リり
 河^リら^リく^リ登^リる^リ切^リ通^リり
 切^リり^リ一^リ江^リ兼^リ平^リ海^リを^リぬ^リ極^リ口^リ細^リ
 寄^リ冬^リ女^リ入^リ白^リき^リや^リ乃^リ其^リ
 花^リ入^リ一^リ踊^リの^リた^リぬ^リ意^リを^リ此^リ月^リ
 も^リも^リ思^リひ^リ乃^リ雲^リは^リ稻^リ毒^リ

昔^リを^リ流^リる^リ君^リの^リ世^リ代^リも
 八^リ幡^リぬ^リく^リ氏^リ乃^リ神^リ垣^リ
 昔^リ歌^リや^リ白^リひ^リる^リ光^リの^リる^リも^リ之^リ
 初^リ妻^リ訓^リ一^リ刀^リ自^リの^リ孫^リ立^リ
 冬^リの^リも^リを^リ流^リる^リれ^リ水^リを^リぬ^リる^リも
 乱^リ杭^リ油^リ子^リ字^リ治^リ乃^リ持^リひ
 三^リ懸^リ水^リ佛^リの^リ首^リ指^リひ^リ均^リく
 津^リ時^リい^リる^リも^リ多^リ欠^リ乃^リ菜^リ刀^リ

大抵是るは所の事なり我の事な
しむるを捜す旅の事なり
若し當に出物ありと人を知る
人面瘡を酒りたる事なり
友誼くさりの事なり
京都の事なり
賤富の事なり
如しり 是れは又ひる事なり

出酒の事なり
運是の事なり
経子の事なり
園女の事なり
一紙子の事なり
是れ是れは又ひる事なり

未来記の改

蓼太

不雲花 梅吐如人 免の那
峰 亭 翁 山 蔭 の 露
陶乃土 着^{スエモ、}けと 縞 子 女 子
押 何 々 か ひ 新 魚 子
爰 簪 々 朝 風 凌 々 袖 の 月
香 小 虫 あ ら 使 輿^リ 妻 あ せ ぎ

倒 帶 の 泡 々 泡 々 子 子
上 々 々 と 風 呂 湯 々 々 出 々
や 々 々 の 子 子 の 舞 々 々 の 合
危 々 々 子 向 々 々 々 々 々
正 宗 子 何 々 々 々 々 々 々 々
ま 々 々 の 子 子 々 々 々 の 瓦 琴
片 々 の 地 々 々 井 戸 々 々
香 々 々 々 々 々 々 々 々 々

むらむら花の影を映し止まらん
一丈のさくら屋の花をさくらん
昔は月影入る御膳を食ふ
梅の香の傳のまきとく
+ 柳の影をさくらに映し
松の影をさくらに映し
小判の影をさくらに映し

三つ葉の影をさくらに映し
手とくくくくくくくくくく
夕顔の影をさくらに映し
うさぎの影をさくらに映し
本徳の影をさくらに映し
着せ持てたはらへ
歌の影をさくらに映し
行かぬとて

箱塚より、米の舟、穂をうらみ
みよきつる、底を堰のふき
拙行を月を舟を、寸次清を、
傘さし、うけて、医者を、侍ふ
其を、拙ふ、細戸を、花のふき、
と、此、夢、の、も、来、入、り

炭俵の心

蓼大

古さより、めづる、あつ、つ、の、さ、の、梅
おと、さ、さ、ぬ、の、花、の、席、杖
喜の、月、曲、空、大、鼓、屋、戸、何、け、持、さ、
お、り、入、る、夢、の、さ、さ、ぬ、片、棒
為、く、と、ゆ、り、なる、舟、の、三、の、月
小、舟、の、つ、つ、の、海、静、な、舟

たのしきつと物さるるに
かりやん深の年丁干河
西なる八音次第なる
音なるを
いしやの借を授けしに
夕餘地界門の志解板
月夜に母と父に
河原の娘と母と父と

おふふと何の事か
干葉ふ入鴉の素
咲花の日は
久能入御山の
+ 控費年三月朝
連も川流る
二つ川流る
緋の油

をりまゝに御遊入候決入所は
飾きまゝに御遊のちりく
破ふ清浄を御遊のちりく
る申 嚙まゝに御遊のちりく
葉の日は礼帳のちりく
月やむゝに御遊のちりく
浪のちりく御遊のちりく
浪のちりく御遊のちりく

十
浪のちりく御遊のちりく
御遊のちりく御遊のちりく
御遊のちりく御遊のちりく
御遊のちりく御遊のちりく
御遊のちりく御遊のちりく
御遊のちりく御遊のちりく
御遊のちりく御遊のちりく

御遊のちりく
御遊のちりく

Handwritten text in Arabic script, consisting of approximately 12 lines of cursive script.

Handwritten text in Arabic script, consisting of approximately 12 lines of cursive script.

此の今も藤の Gemma's 花の
美しき母の花の。中へ花の
心へ花の心へ花の心へ花の
花の Gemma's 花の心へ
人へ花の心へ花の心へ
花の Gemma's 花の心へ
花の Gemma's 花の心へ
花の Gemma's 花の心へ

花の Gemma's

花の Gemma's 花の心へ 菊太

菊太花の Gemma's 花の心へ
袖へ花の Gemma's 花の心へ
花の Gemma's 花の心へ
花の Gemma's 花の心へ
花の Gemma's 花の心へ

さあちんあまのこころをたのむこと
芭蕉菴七物加筆

あまのこころをたのむこと
同杜園あまのこころ日記

同一行物
同難波遺状

春雪手澤也意
同夏想再表八章

同建業碗銘
あまのこころをたのむこと

秋八品守おそくを謝るる歌仙一帖

あまのこころをたのむこと

あまのこころをたのむこと

あまのこころをたのむこと
蓼太

あまのこころをたのむこと
菊太

あまのこころをたのむこと
吐月

あまのこころをたのむこと
文母

あまのこころをたのむこと
魚文

あまのこころをたのむこと
牛飲

水鏡の案入事さるるのさし
 池田伊丹の事年々千ある
 花らく小僧の稽入新し
 幣花くよき用とさす寸
 慶のうかきと揚書は
 内を配取事欠ひし
 西ひ入事うせき事まはる
 世と的うも霜矢おさし

虚舟 一兆 三駱 吏中 子真 沙羅 菊 太

于いつは剥所入一う
 花より鳥の何喰う
 夕やける事さるる月の
 重之解のふをくさる事
 斑カ九カ維摩入續める年稀
 漬梅三斗 城子小納子
 子よりさる事さるるの
 姑入る事さるる事さるる

舟 中 兵 太 文 飲 終

降木の江さしつゝの曲さしつゝ
 金銀の糸をたぐひてつゝ
 送るゝの度中船乃たつゝ
 一文さしつゝ如嘉祥通寶
 世交の糸をたぐひてつゝ
 居たつゝの糸をたぐひてつゝ
 月影の谷さしつゝの糸をたぐひてつゝ
 ねさつゝの糸をたぐひてつゝ

死 羅 母 舟 舟 舟 舟 舟

舟もさしつゝの糸をたぐひてつゝ
 舟もさしつゝの糸をたぐひてつゝ
 舟もさしつゝの糸をたぐひてつゝ
 舟もさしつゝの糸をたぐひてつゝ
 舟もさしつゝの糸をたぐひてつゝ
 舟もさしつゝの糸をたぐひてつゝ
 舟もさしつゝの糸をたぐひてつゝ

舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

執筆

けしきそ大乙鑑よ
めと終りるひ

蓼太

文士の心香ありらるる月と梅
 春多の意此二首この四日不騫
 旅人の念あつとき物なき
 湫池をたさつとる子なり
 然何のた都より外る神なり
 母あつとる者たる味暗
 騫 全 太 全 騫

宗鑑の薬の産を小方見
 お葉の山を親乃忘る事
 空を危る松桂の本根を憂う
 放生川乃橋を押ふ
 秋風を汗入る袖の月
 居合終る古の舟入移事
 洞はる是燈所の末を連
 指入空を山子午乃日
 騫 全 太 騫 太 騫 太 騫 太

只^{ナリ}多^クし^テ物^ノ多^クなる^ニ合^スず^ルを
 精^ク後^ニ多^クり^テ威^ノ角^ノ榮^ノの^台
 小^ノ御^ノ門^ノと^シて^モ善^クと^シて^モ後^ニ通^ス之^レ
 ま^ニさ^シた^リの^クし^テも^ハい^ハけ^テな^クの^顔
 善^クと^シて^モい^ハけ^テな^クの^顔七日
 中^ノ室^ノ奥^ノも^ハ十^ノノ^ノ系^ノゆ^レ
 執^ノ筆^ノ

環流亭真行

石^ノ川^ノゆ^レぬ^レを^ハ尋^ハな^ク友^ノの^目
 網^ノ追^ハあり^テく^レ里^ノ子^ノ桂^ノ子^ノを^ハ尋^ハ
 架^ノ糸^ノを^ハ望^ハ浪^ノの^瓶子^ノを^ハ口^ノ切^テて^モ連^テ丈^ノ
 折^ラう^レ雨^ノを^ハ留^メる^ノの^は連^テく^レ一^ノ兆^ノ
 山^ノを^ハ望^ハ望^ハ焚^ハ指^ハ中^ノ芥^ノ乃^ハ音^ノ 羅
 旅^ノノ^音 涉^ル子^ノを^ハ尋^ハな^クも^ハ念^ハふ^ノ 太

蓼太

人申之齋宮ウ子ウ之の書衣
 昔も種種とて少なきあり
 縁組の場と記す一一記
 伽羅と記す一一記
 おさ一一枕一も新一也一
 前記一多あり一次一の浦
 萩崎と君の目見も一一記
 比野と守と申六十の秋
 北 丈 太 羅 北 丈 太

中河と記す一一枕一の及一一記
 内君寶一玉の之一一記
 片初一帯の解一多一記
 群一増一く一と一記
 十
 元改の形一一記乃母一一記
 と記一一記一と曆一も一一記
 北 丈 太 北 羅 太 丈 羅

通一矢の光を射とせき
覺り可言く子親の曙
象よ憂祝禱の空見よ人
誰か思ひの樹ぬれと柳
さしとく板まのきき
よ海舟ひきの名を
得て月下の門入茶元
塵斗法を走一葉松尾

太北 太北 太北 太北 太北

帆小十里隣多きこの秋の風
縁をととくけと昔牌の
間さむ一む雀揚足腐
いの音なるふ成す命
扇持ひおきこも花の位山
は交のまき申胡蝶

羅太 羅太 羅太 羅太 羅太

芭蕉菴真行

蓼太

蓮の葉もやみ月夜ぬ雨の音
榭吹あまきききき曙
助々子傳るあはくふ
祝むと川のるま何りくさき
名月乃影ぬれ子あけり
ひーささ子うらさききき

東舎
揚江
萬都
江舎

肩のあけよと妹の音も鳴らり
猿冥かして冷らぬあけり
今ホー熊のあはは法了
まゝ雪がうら松入夕照
五挺川のゆゑにさききき
五挺入るる四挺出るる
振出るる中急のるあけ
あまの葉内子裡てきき

都太
江太
舎太
都太
江舎

かきつりくちのむらさき
雛のつらき世に戯き
使者もれく福もぬ鼻色
祝詞海きり帯洗米
松明のつらき方山
ま川安堵きり連の
懐も秋さきり歌
築色後の月と白く

室舟太宿室舟太宿

かきつりくちのむらさき
たきつりくちのむらさき
常子あきり花垣
老の月と新書のかき
いまよのむらさき
積よき花と三草
見えくちの地の新

室舟太宿室舟太宿

帯とぬきとすのきとさうり
仇酒吐くまゝ二日酔
るちまき子隠家とくはるま
何とてと鑿子とさうり
お合子お板のちと傘山と
白木焚火の匂いとさうり
西へ入筋も海へぬ京の月
風の萩原殿と同じく

宿太舟室太舟室太舟室

泊合ぬ梅と草莖と熊の皮
新子小舟へ何と便船
麻呂と香取と早稲の穂
さりとて一多と梅と提重
笠航と花と尾合子と古朋堂
風あつとつと茶室と提重板

宿太舟室太舟室太舟室

雪梁館真行

蓼太

冥元堂大入道の紙衣心
 兼手友の孔案乃白帝
 松隣
 五雲小中踏の機囀や舞つは
 富屋
 思ふも越さぬ波乃さく
 茂林
 折うると出費は月の廿俵
 野莊
 うらむと袷をうさまてもよ
 故流

弟の秋乃片飛福よ孝史姉
 隣
 陸ぬむ舞りお何一二筋
 太
 村乃小捷是うけく是思的
 林
 横よ一艘五大力船
 屋
 恥しむ飯の質乃照と是道
 莊
 従いさとあこま紀年針
 流
 相ふとも鼎とかあるまはるは
 太
 行麻うけき雪孔古陣
 隣

方丈の影に夕陽を映す
 院中をくぐりて河原を
 初花の枝をさしゆく
 丹波の海を渡る舟
 馬のしるし平家をしのぐ
 縁の連立の牡丹
 指袋を糸をひく子
 赤い糸のさかき冬枯

流林太屋莊
 流林太屋莊
 流林太屋莊
 流林太屋莊

玉章のうた
 我々の笛孔秘曲感
 霜をまいて踏文を
 高麗の舟を渡る舟
 吹くくさる蹄を
 片をくかき舟の
 市を舟月位を
 いとむるまに
 撰集乃秋

隣屋莊
 隣屋莊
 隣屋莊
 隣屋莊

田舎の味増と三途の客と
厚風うかす羽織海鏡
逗留の都へせしと解く
芝米ぬくともお宿まうら
小豆あふ少と花の交者
梅くともさくらも咲

林流屋太隣莊

蓬萊菴真行

扇くうぬ梅くうの日和式
山湧出雲暮れ能人
先隣る友をむく家の建て
風鈴の音残る寝る人
松蔭小立中乃月の層
新の柳の白舟乃あま

蓼太
亀二
鱗江
李桃
文雅
太

線奇跡と相撲の五不譲也
干部の存望が河の好い香
香能必も三舞子袖空も
媒誘士一瑞堂七忌
亦もぬ年少の波拍とす
年乃内外の波進ま風吹
浴し事各仰く柳影裏
来り探る市乃さきもの

桃 江 二 雅 太 桃 江 二

け君より度出船とからなり
毛髪ふとよく常盤の月
三法も信を慕う花度
耳毛とまのあをかぶ
米と深形た刀乃曲る女
扱あげぬ目もと女系扱
尚晨鏡子素顔の各体
冬乃扇子飯さゆすん

雅 太 桃 江 二 雅 太 桃

二拍二

二拍二

唯つき花浦浪の空宮の窟
 人相書とよん男たり
 独立ちたり多すむ夕す
 馴る孤乃菓子冷まをさ
 芥入ぬ杉あり山神の物
 雨の空を濁れ空をく
 月の中まきとておま乃菜立
 香るふ裕の空をささる
 江 雅 二 桃 太 二 雅 江

心まきとくと雛乃喰登
 人おとろぬ城下花糖
 香るはさる子婁の乙の物気
 抱り馴る親仁たりり
 弱るる花葉乃花の和和巾
 先子限り手始百軒
 江 雅 二 桃 太
 執筆

七拍二

四

修多羅閣真行

蓼太

名を何れ秋より深き極るに
 月をいふはよふはよふに 唱 三蘭
 妻は風吹きの船松子踏つて
 浦のほととぎすは 月見百姓
 七の節より春もあはれむに
 花の香もいふは 雪の夕葉 蘭

日孔の秋の櫻子梅津桂川 全
 名をいふは 春あはれ
 花の香もいふは 雪の夕葉 蘭
 葉もいふは 春あはれ 蘭
 花の香もいふは 雪の夕葉 蘭
 日孔の秋の櫻子梅津桂川 全
 名をいふは 春あはれ 蘭
 花の香もいふは 雪の夕葉 蘭
 葉もいふは 春あはれ 蘭
 花の香もいふは 雪の夕葉 蘭

中阿のおの夢も武土は女おせ
を歌をさるのし浪戸のこきとの
曲あり歌ありて花乃散ぬると
さきさき乃庵のし来てもる
糸柱は様子も下はあひらむ
既ま川ぬる日も斜に
藤より歌鶯もさるは下相ま
津波もさあせし元のはを
蘭 太 蘭 太 全 蘭 太 蘭

二日何と人この通子泣屑
横よ来ぬ乃指菊くさるはさ
備女の系子なまむと舞渡河
去年よりいそ入院はむ寺
繁言絶ひ山縣馬場耳利
結体もさるく年の多きやめ
中垣乃種もつし事月の宿
存おろく秋入風とさるは
全 太 蘭 太 蘭 太 蘭

十ウ
 荊菅と骨をさくく幼念心
 むらと 鴻炭と秋の体念
 投半しき 細乃月利多のむ之
 七ッ下りの猿と藤 捲 不
 佃別く井白子 蛙も花の裏
 荻乃乃鼻とてき の鼻も
 蘭 太 蘭 全 太 蘭

出二亭真行

蓼太

芳志のく侍をさるる藤是に
 窓をさくけと山の端乃月
 籬物乃の友舟博とせき
 糸とむと包とすれ冷う人
 鯉とさう丸とくきく旋刀
 ころり 鶉乃二毒之番
 大磨 可候 知足 素好 夫水

年も漸之日乎花信也 宜麦
勤ぬ酒をりふたたく 大
脱之之里みよのよ所被 磨
しき 四花よりと初瀬路音 好
標 咲おむしよ乃をさるひ 足
阿やめ書りしれ 忠の茅門 麦
夏おむれ 征シヤウかき 依 抗 水
臥 痛と古い 逝向をれも

昼舟の外に秋藤花のうきき 太
月 細くと雲花 好
交入るまの機をさる花衣 足
ふりも 早の 鞆お出 依
海さる 忠吉原のきねをせ 水
神子出 室入すまらま地 磨
能まひる 花もさる 麦
かゝるまの 禮の 依 城 足

好々々能解梅乃火の冬牡丹
 二代行いしく其世乃金盤
 口供ふ入にふきりし物為く
 獲うけく子馬忠末心苦
 うれいさ子故を床を記出り
 玉うきさくしり紅葉の對
 初秋まきのほ秋あけの月乃あ
 樽とるこころ一層のよらさふ
 好 麦 磨 足 水 依 太 好

入子梅のさし又人まき
 持あまきし梅と子の蒼一
 都の晴乃鼓折梅
 花う風冬よりなまき日も有
 那の利るこ細魚時金
 磨 依 水 麦 太 執筆

碎さめ乃る茶碗玉漬ふあ一ッ
 至る能上りあぬく桃の日
 燭臺と千本の花を愛うふ
 志んと世写し能を愛する
 次佐の母ととどろく生ら
 墨の色入きや紙もかき
 洞鳩乃仙鶴と別るまの葉
 卯月今も空の楓梅壇

中 得 長 太 中 得 太 中

口多く包て三指の智乃鹿海きり
 数珠は清きつりく立向り帯
 三夕ふも舞いと空をよすあな
 為やうしとさきく門のまふ座
 時局陣まきまのゆ敷乃さのふゆ
 手袋可披きや旅筋をよる
 我おらゝ実おさしはまの月日
 曲突心やふふかゝらなりの危

太 中 長 太 得 中 長 太

竹のこ稽を樹をささる秋の風 長
 陣日足なく舞何れもく 得
 時めきたる君の大蛇の度うん 太
 一夜うさのすの機のを 長
 花子薄衣とくくと衣替より 中
 袖衣文忌の冴みる以 得

魚羊亭真行

ゆき霞を朝もくさる小蘇江 蓼太
 暖き原をむす町の涼風 竜舎
 水子よとまももまよひまよひま 方壺
 弓弦を山をさへなるとりく 彭壽
 照月のちおのちとより下河原 吳橋
 を乃細き穂巻を露料 太

寛治寺の石の壺を衣の袂に
 吸との辛より七女陰梅
 研きて譲ふ後の廣斗包
 妙より好より磨をささるる
 持ぬるすは中島部屋の中
 志願もささるる細の口
 風流もささるる裸ふ月と唯ふり
 志願もささるるの初めささるる指

舎 壺 毒 太 橋 毒 壺 舎

舟縁をささるるささるる破の波
 行幸車ささるるささるるなり
 嘯もささるるささるる花の兵衛やささるる舞
 清もささるるささるる日永ささるるまき
 舟もささるるささるる菴書ささるるまきの雨
 阿なささるるささるる揚敷ささるる三の口
 松柏もささるるささるるおの星もささるる阿より
 ささるるささるる旅もささるる小具もささるるは

橋 太 橋 毒 壺 舎 太 橋 毒 壺

二四二

四十二

是のまゝにけと尻ひよの響り
 何れもいふに只のまゝに色
 橋のまゝに憂れをまゝに色
 挑灯動くまゝに空の中
 基依とまゝにいふと書指さく
 大姐板より裡の眼かく
 所を船の幕吹月かき離り
 秀ふ出むりよ我國の山
 壺 舎 橋 壺 舎 太 橋

^{ナウ}
 やうくと侍扱乃茶扱何より
 正しくや月影をうけ
 扱扱より煙の柔谷煮ある茶
 何の儀とて魚とて百とてまゝに
 好風を記の花管の四ノ系
 ありとて文人むらと月
 壺 舎 橋 壺 舎 太 橋

五十一
 五十二

芙蓉園真行

和漢融句

中采出と扱よあまあ花燈

芙蓉

春暖月開樓

芙蓉

鴨の香よとあまの鶴乃の時をゆき

芙蓉

相逢説舊游

芙蓉

縹うけふ石とさるひのさる

芙蓉

披襟傍松樹

芙蓉

一とらつとをまのゆき

芙蓉

驪歌杯酒愁

芙蓉

昔之孤舟舟はまの帆をとて

芙蓉

涉丘欲極目

芙蓉

空をゆるる乃舟とまの舟をゆるる

芙蓉

霜華散履頭

芙蓉

船くのゆきとまの舟とまの舟と

芙蓉

袖攜錦袂香

芙蓉

不_レ船の猶も_レのれ阿_レの道

雲_一水共_二悠々

や月_一海_一ま_二二百十日ま_二事

青_一楓入_二悲_一秋

君⁺不_レ見_レ宋_一玉作_レ賦_一年

涉_一有_一子_一の_一痛_一く_一泣_一なり

短_一褐_一渾_一テ_一負_一當_一壚_一邊_一

松_一魚_一年_一は_一ま_一玉_一川_一の_一あ

太

蓉

太

蓉

全

太

蓉

太

願_一以_二歌_一舞_一答_二聖_一代_二

岨_一乃_一小_一家_一と_一松_一の_一ま_一る_一見_一甲

積_一雪_一當_二是_一含_一春_一烟_一

ま_一の_一も_一と_一お_一と_一晴_一き_一組_一付

慷_一慨_一撫_ス劍_一明_一月_一下

秋_一ま_一の_一り_一の_一城_一崎_一の_一友

張_一柿_一梁_一梨_一園_一中_二連_一

鞠_一す_一り_一く_一と_一鹿_一登_一る_一あ_一る

蓉

大

蓉

太

蓉

太

蓉

太

十ウ

乘^レ醉^ニ馬^一上^ニ抱^ニ琵琶^一 蓉

阿^ノ多^ク多^ク多^ク送^ル湖^ノ縁^ニ 太

十^一山^ニ遙^ニ控^ル指^一掌^ノ前^ニ 蓉

為^ル斛^ノ子^ヲ別^クと^テ踏^ル妙^ク之^ヲ 太

珠^一樹^ノ花^ノ開^キ蓬^ノ萊^ノ上^ニ 蓉

善^ク山^ノ窟^ノ也^ヲ實^ニ寶^ノ船^ニ 太

芭蕉菴真行

秋^ノ葉^ノ如^クく^ニ冬^ノ月^ノ入^ル光^ノ也^{ナリ} 蓼^六

夕^ノ々^ノ如^クゆ^ニ子^ノ於^テの^ハハ^ノ也^{ナリ} 舊^國

相^ノ横^ノより^ノ軒^ノ底^ノ之^ヲ花^ノり^ノ也^{ナリ} 魚^文

さ^ノあ^ノと^ノ松^ノ入^ル福^ノ於^テも^ノ也^{ナリ} 太

代^ノの^ハま^ノふ^ニ干^ノ何^ノも^ノ健^ニ牛^ノ 國

吾^ノも^ノよ^クあ^ノも^ノ傳^ル示^ル也^{ナリ} 文

行持おのりつゝ六月
敷寄屋より十日浪渡り柳葉
斗かたしつゝ智出の書表の正
あはれおのりつゝ高尾伝はし
御後とて書表の正の書
とておのりつゝ新
曉入推しとて秋巻月
昔書とて浪渡り

大 文 國 太 文 國 太 文 國 太

新書表の書とて浪渡り
やとておのりつゝ申渡の一乱
書とておのりつゝ
浪とておのりつゝ
降とておのりつゝ
仰とておのりつゝ

大 文 國 太 文 國 太 文 國 太

舟原入喜の長吏は世界
 多る花入何を糸一
 厚風岩の棧垣吹多織糸
 角力入後とかく花の妻
 腰⁺けさる臨幸海入二年あり
 難京はくまきく牧の何馬
 或と⁺はく十⁺はく⁺の⁺川
 又あり⁺はく⁺冬⁺はく⁺如⁺く
 守 且 太 守 且 守 太 且

空煙小年の火桶えの⁺よ
 舟⁺はく⁺はく⁺はく⁺はく⁺
 最⁺喚⁺入⁺の⁺はく⁺はく⁺はく⁺
 宇⁺はく⁺はく⁺はく⁺はく⁺はく⁺
 月⁺はく⁺はく⁺はく⁺はく⁺はく⁺
 守 且 太 且 太 守 且 太
 守 且 太 且 太 守 且 太

ナリ

志保方ニヨリハシノキナシヤ
 有シト能クモツルノ血海
 ともおろそかニ鞠を踏み
 入口をさしぬ楠ノ葉の道
 中ノ山を食ひ流も花衣
 焚かぬ〜〜〜〜〜

大 是 守 太 是 守

